

雨の思い出

三菱重工業株式会社
九州支社長
高木 正浩
Masahiro Takagi



「雨の思い出」と書くと何となくロマンチックな響きがあるが、私には大雨の中、ズブ濡れになりながらゴルフをしたとか、台風襲来の折、工場の屋根が吹き飛ばぬよう暴風雨の中をパトロールしたとか、無粋なことばかりである。

その中でたった一つだけ忘れられない雨の思い出がある。

今から20年前、私は南米にあるコロンビアに滞在しすでに3年が経過しようとしていた。この国は中南米と南米をつなぐちょうど徳利のくびれた部分に位置し、赤道直下にあるため1～3月の乾期以外気温は40度近くにもなり、年中暑く、毎日決まってバケツの水をひっくりかえすほどのシャワーが降り注ぐ典型的な高温多湿の熱帯気候域である。従い、人が文化的な生活ができる所は涼しい高地が主体となり、首都ボゴタ（現在はサンタフェ デ ボゴタと呼ばれる）は赤道近辺にありながら海拔2600mの高地であった。

私はこの主都ボゴタより800km離れたカリブ海側の熱帯地域に三菱重工がコロンビア電力庁から受注したセレフォン火力発電所建設のため建設技術者として滞在していたのである。現地はコロンビア人ですらこの地を“グアヒラ”（古いスペイン語で若干蔑みの意味を込めた“田舎”という意味）と呼び、最も嫌がる陸の孤島であった。当時若かったせいもあり、どんな所か知らぬままカリブ海の美しい夕日や、世界的に有名なコロンビア美人を勝手に頭に描きながら数人のメンバーと日本から27時間飛行機を乗り継ぎながら意気揚々と現地に赴いたものである。

時差14時間、日本の裏側に位置するこの地は平和な日本からは想像を超えた場所で、広大なマリワナ栽培が行なわれている隣接地にあり、コロンビア政府軍とマリワナの権益を握るマフィアが年中抗争を続けている危険地帯であった。

当然発電所建設現地近辺の治安は驚くほど悪く、現地乗り込み後、半年で完成した粗末な日本人キャンプハウスには24時間銃を装備させたガードマンを配置せざるを得ず、発電所が完成するその後の3年間、ずっと高い金を払いながら日本人の安全を確保してきた。

勿論発電所建設中は常に種々の危険はつきまとい、ピーク時現地にいた1000人を超えるコロンビア作業員同士の喧嘩、サボタージュ、恐喝は日常茶飯事で、その上熱帯特有の気象や環境の違いに悩まされ続け、日本人の健康問題、大雨による道路の決壊、保管機材の水没、盗難と今思い出しても胃がキリキリ痛むほどトラブルは続いた。

しかし工事は遅れながらも日本人指導員の懸命な努力で3年後にはやっと発電所は完成しコロンビア電力庁の立合で連続一週間、168時間の公試に合格すれば発電プラントを引渡しできる状態までこぎつけた。

ただこのプラントは日本では考えられぬことであるが、当時客先の資金不足もあり、蒸気を冷却するために使う海水の取水は海岸から突き出した200mの仮設キャナルを作り、ここから沈砂地を経由して海水をプラント内に取込むようになっていた。

（勿論数年後本設は海岸から500m先の深海部まで大

型パイプを敷設しここから取込むようにしたが) 発電所を稼働するために、大型の取水ポンプを動かすと海底の砂や堆積した枯葉がこのチャンネルを埋め尽くす現象が発生し海水は満足に取れず必然的にプラントの運転が出来なくなるという危ういものであった。

従い当然のことながら「本設の取水ラインが完成するまでは公試は中断すべし」という意見が社内・客先関係者にも多くあったが、これを延期すると本設ラインがいつ完成するかわからず、プラントの引渡しができるのは何年先かわからぬという不安と(事実このパイプラインはさらに4年後に完成した)日本人指導員は今まで3年間の厳しい作業環境から早く逃れ、一時も早く日本に帰りたいという切羽詰った気持ちからあえて公試の開始を電力庁に宣言した。

我々にも公試に対し全く成算がなかったわけではなく、今まで3年の滞在経験から雨期に入り雨が降り出すと、乾期に吹く強い北風がピタリと止みチャンネルに流入する砂や枯葉は極端に減少する現象があるため運転は可能と見込んでいた。

当時現地にいた日本人は皆、神様に雨乞いするほどの気持ちで雨が降ることを願っていた。

しかしいざ運転を開始すると、切ない思惑は見事に外れ雨期に入ったのに願った雨はいっこうに降らず、我々の気持ちを逆なでするかのように今まで以上に北風が吹き始め、幅6m水深4m以上あったチャンネルは見る見る内に砂で埋まり3日後即ち72時間後には水深3mとなった。プラント運転続行するか否かハムレットの心境で悩みに悩んだ。当然のことではあるが続行してプラント機器にトラブルを発生させた場合、この修復の時間と費用を考えると止めるべきと思うし、逆に今公試を止めると数ヶ月以上かかって不眠不休で調整してきた準備作業は全て振り出しに戻ることになる。あれこれ悩む内にも砂は増え続け、5日目にはとうとう水深2mを切るように

なり水量不足が徐々に発生し、プラント機器保護のためにも中止やむなしと考えたが、それでも公試を中止する合図の連絡はどうしても出せなかった。

悶々と悩んでいる内に全く天の恵みとしか思えないことに5日目の夕方より急激にコロンビア国内の電力需要量が低下し始め、フル操業時の35%で運転せよとの指令が出されたため取水量も急に少なくなり危うく168時間のプラント公試を完了することが出来た。

完了の瞬間、日本人指導員全員が口がきけぬほどの放心状態となり、その場にヘナヘナと崩れ座りこんだ。3年間汗と涙で頑張ってきた出来事が走馬灯のように頭の中に駆け巡ったことを昨日のここのように思い出す。その内、公試に立会った客先副総裁が真っ先に訪れ『おめでとう！日本人のプラント建設に対するエネルギーには敬服する。コロンビア国民を代表してお礼を言いたい』と握手を求められた時には、それまで耐えてきた涙が目から吹き出し、何も見えぬほどであった。

3年間何かと論争を続け親しく出来なかった人だけにこの言葉ですべての苦勞が吹っ飛んだ気がした。顔中を涙に濡らし公試完了の祝宴会場に向おうと外に出た途端、全く皮肉にもあれほど待ち望んでいた雨が我々の気持ちをあざ笑うかのごとく滝のように降り出した。

私は涙を人に見られなくなかったため、顔を天にむけこの雨の中をズブ濡れになりながら一人でフワフワ、まるで雲の上を行くような気持ちで歩いた。一生忘れられぬ雨中散歩であった。この時ほどものを[創る]喜びを感じたことはない。

(株)フジコーさんの技報、tsukuru [創る] を拝見し20年前を思い出しながら筆をとった次第です。